演劇脚本上卷

歒討噂古市

上總綿小紋單地

合壹册

版權
興行權 所有

No14515

○敵討噂古市

序幕　観音前居酒屋の場

一 百姓正直清兵衛　一 松本屋彦十郎
一 居酒屋久七　一 立場の喜兵衛
一 判人　源八　一 喜兵衛の娘お蓮
一 百姓　畦六　一 百姓　田五七
一 居酒屋の丁稚善太　一 瞽女　おそよ
一 瞽女　お市

本舞臺立場居酒屋見世の体爰におそよお市の瞽女善太の小僧と喧嘩をして居る是を畦六田五七の百姓留て居る馬士唄にて幕明く

ト捨せりふにて喧嘩をする向ふより彦十郎羽織を肩へ掛女郎屋亭主の拵へ源八半合羽脚半判人の拵へにて出て來り此中へ割ては入り（源八）コウ〳〵危ねへ〳〵おめくを相手にして怪我でもさしちやァ成らねへ　まァ〳〵待つしやい（そよ　市）ごぜの坊でもお客様だぞ（善太）お客ならお客の樣にうるめの錢を拂ふがいゝ（彦十郎）是さどふいふ譯か知らねへがまァ〳〵おれに任して下せへ（三八）イエ〳〵うつちやつて置ておくんなせへ（源）

うつちやつて置く呉へなら留やアしねへ待といつたら待ねへのかヽト源八左右へ引分る（彦）モシ一体こりやアどふ云譯でムりまする（畦六）イヱ譯と云は斯でムりますアノ姉ヱ達が肴を聞時うるめが有と小僧がいつたを賣目と聞違ひて干物なら錢を遣ねへと云ものだから取ねへドやア成らねへと夫から起つた此喧嘩さ（源）そうして其干物の錢と云はいくら計りでムります（田五七）三十二文さ（源）アノたつた三十二文かへ何の事だ（彦）其三十二文はわしが拂ふから小僧も姉ヱ達も了簡するがいヽ（そよ）そんならお前様がお拂ひ被成て下さりまするか（市）勘定が濟だら干物はわしがお貰ひ申そう（善）ヱヽ欲張ッたやつだ（彦）源八干物をやつた上で一ぺいづヽ呑まして呉れ（源）畏りました○ト財布より百錢を出して（夫干物の錢が三十二文○是で姉ヱ達も一ぺい呑ねへ子僧も團子でも喰ふがいヽト百錢を一枚ヅヽやる（そよ　市）其は旦那様（三人）有難ふムりまする（彦）コウ源八久七さんを呼で下せへ（源）畏りました○ト奥へ向ひ（久七さん〳〵一寸顔を貸ておくんなせへト奥にて（久七）はイ〳〵只今參ります○ト相方にて奥より久七世話形り紺の前垂にて出て來り（是は松本屋の旦那よふお出被成ました（彦）ヲヽ久七さんかいつも御繁昌だね（久）有難ふムります（源）トキニ六十近ひおぢいさんが旦那を探して來やアしなかつたかへ（久）イヱまだお見へ被成ませぬ（源）夫ドヤア旦那一トロお上ン被成いませ（彦）ヲヽそうせう（源）久七さん何ぞ味ひ物を拵へておくんなせへ（久）どうで味ひ物

はムりませぬからまア有合で差上ませうト驛路入の伊勢音頭に成り上の方より清兵衛脚半わらド尻はしをり笠を脊負くわへ烟管にて草鞋を拵へ乍出て來り花道の方へ行を畦六田五七見て（畦）ヲイ〳〵そこへ行のは清兵衛殿ドヤアねへかト清兵衛振返り（清兵衛）ヲヽ誰かと思つたら新田の畦六殿に藪際の田五七殿か（畦）ヲヽ丁度こなたに用が有て逢ひたく思つて居た所だ（田）まア爰へ來て掛さつしやい（清）何の用か知らねへが急な事で行ねばならねへが歸りドやアわりいかな（畦）手間は取さねへから（田）まア爰へ來さつしやい（清）夫ドやア一寸休んで行ませうか○ト本舞臺へ來る（ゆるさつしやれト床几へ掛る（久）清兵衛さん此間はどふなすつたかさつぱりお出被成下ぬが（清）此頃は植付でごつていも出る事がならねへ○トキニわしに用とは何だな（畦）用と云は外でもねへさつきから二人りで遣つて居るが遣たり取たりが世話しいから合をして貰ひたいのだ（清）そりヤア忝なひがけふはちつと呑れない（畦）是サいつも呑乍なせけふは呑ねへのだ（田）持越てでもいるのならわつ燗でぐつと遣がよい（清）何そんな事ドヤアねへが大事な使ひに行のだから行ッて歸る迄呑事が出來ねへ（畦）どんな使か知らねへが子供ではあるまいし何も酒を呑だ迚行れねへ事も有まい（田）たんと呑ずと一杯呑つしやい○ト清兵衛の前へ茶碗を置酒をつぎ（サア肴次にして置ぞ（清）イヤ〳〵庄屋様の言付だからけふ計りは呑れねへ（田）こなたが呑ずばモウ一ッ重ね様か（畦）呑ばいヽのになアト畦六酌をする

田五七味そうに呑む清兵衛段〳〵呑度なる思入（彦）サア源八大きい物でやらつしやい
（源）イエ〳〵そうは行ませぬ（彦）何のいけねへ事が有ものか（そよ）モシ多ければ助
ケて上ませうか（市）此ゐ酒ならいくらでも呑ますよト源八茶碗取て（源）お辭義をしい
〳〵呑者は酒でムりまする〇トぐつと呑んで（アヽいヽ心持だト此内清兵衛源八の呑のを
見て居て同ド樣に眞似をする久七銚子を持て來て（久）モシ清兵衛さん一ッ位はいヽドや
アムりませぬか實にけふの酒はお前に呑せたい酒ドや（清）御深切は有難ひがどふも庄屋
樣の云付だから呑れませぬ（畦）コレ清兵衛殿わしらは同村の事だ故祝義不祝義共に席順
で同席をする中だからいやならいやでゑヽけれど他人樣があの樣に御深切におつしやつて
下さるを呑ねへと云事が有ものか（清）夫ドヤア一杯呑でも能ふムりませうか（畦）能な
くつてどふするものだ（清）默つて居て下せへよト茶碗を取る（畦　田）何云ものかなト
云乍酌をする（清）アヽコレこぼれます勿体ない〇一粒萬倍〳〵〇ト額へ附る（ドレ御馳
走に成りませうト嬉しき思入にて淸兵衞ぐつと呑（畦　田）どふだいヽ酒ドヤアねへか（清）
ほんにこりやアゑヽ酒だト茶碗を持た儘まだ呑度思入（畦）モウ一ッやらつしやい（清）
能からうかな（田）一寸切られるも二寸切られるも同ド事だ（清）夫ドヤアやつ付ませう
か〇ト兩人拾せりふにて酌をしてやる淸兵衞呑で（アヽ腸へ染渡る樣だ（彦）モシ二獻ト
やア數が悪ひモウ一杯おやんなさい（源）かけ附三杯と云事がある（清）イヤ〳〵そう呑

ではならぬ（畦）モウ是切進メねへから（田）清く一杯呑ッしやいト清兵衛少し酒の廻り
し思入（淸）夫ドやアモウ呑ませぬせ〇ト淸兵衛又一杯呑で（ヤレ〳〵いヽ呑口の酒だ〇
實はわしも飯より好故さつきから辛抱して居たが腹の中の虫めがぐう〳〵と云をつた是で
いヽ心持に成たから一ト精出して行ねばならぬト久七前へ出て（久）清兵衛さん大ぶお
急ギだがどこへ行被成のだへト淸兵衛少し酒に酔し思入（清）久七どん聞て下せへ世の中
に正直程有難ひ者はないおらは此衆も知て居るが自慢ドやないが田地田畑もなく年中庄屋
樣の所へ行て庭子の樣に働ているほんの水呑百姓娘が一人りある計りで內は借家やざい家
財引ッくるめて賣た所が僅貳兩か三兩の身上だが是を見て下され〇ト懐より五十兩入し財
布を出し（庄屋樣から賴まれて太々講の五十兩御師の所迄持て行のだ何と貳兩か三兩の僅
な暮しをするおらに五十兩と云金を正直なお蔭には庄屋樣から渡して下さる何と有難ひ事
トやないか（久）ア是〳〵清兵衛さんそんな噺しはさつしやりますな爰にお出被成お方は
古市の杉本の旦那に判人の源八さん田舎拵の瞽女衆にお前の村の百姓衆氣遣ひな人は一人
りもないから能樣な物なれどごまの灰にでも聞れて御覽ドろ直に其金を取れます必ずそん
な咄しをさつしやりますな（彥）イヤわし抔も商賣づくで年中金を持て歩行が實に道中は
油斷がならねへ（源）得手商人の風抔をして引ッ掛るやつがいくらもある（そよ）ほんに
さつきもわしらがしがない錢で買た酒（市）橫取をして呑だ人が有たト此內淸兵衛思入

有て（清）そりやアおめへ方目がないからだおのが持て居る物を取れると云が有ものだ（久）ハテそこだね（清）どこでムるな（久）サアどふ懐へ入て置ても取ふと思ふ其時は茶か酒の中へしびれ薬を入れて呑せ動かれなく成た所を〇夫ひよいと取ますはうぬどろぼうと云たくつても舌が痲痺て物は云ず見て居る前で取れます夫だから油斷は成ませぬト清兵衛是を聞氣味の惡く成し思入（清）成程そう聞て見るとめつたに油斷は成らぬ是だから庄屋さまが酒呑など云つしやつたのだ今の酒はいゝかの（畦）馬鹿な事をいはつせへおら達が振舞酒に（畦　田）何があるものだ（清）イヤ此酒には何も有めへが何だかおかしな心持に成て腹がちく〱痛イ樣だ〇コレ久七殿手水場を借して下せへ（久）アイ〱奥に有ますから行つしやりませ（清）草鞋でもは入られますかの（久）庭の隅だから大事ムりませぬ（清）夫では一寸借ますぞ〇ドレ勘定場へ云て來やうかト伊勢音頭にて清兵衛下手の庭口へは入みな〱跡見送り（彦）モシあのお人は正直そうな方でムりますな（畦）あれは正直清兵衛といつてわしらが村で評判の男さ（田）凡伊勢廣しと云ど太神宮樣の氣に入はあの男計りだらう（畦）あの又娘の美しひ事は是も伊勢中にない器量さ（久）はんにいゝ娘御が有そうだね（彦）いゝ娘と聞ては耳よりだな（源）モシ内は窪田村でムりますね（畦）アイツイわしが裏手を東へ曲ッて石橋から西へ向イてまつ直に行と大な榎がありま す（田）又近道を行なら庚申堂から左りへは入て條源寺樣の庭通しに新家のくねから眞直

に（源）アヽモシ〱もふ宜敷ムります中〱る聞申ても覺へられませぬ（畦）覺へられずはモウ一遍（畦　田）教へませうか（源）イエ夫には及びませぬト又伊勢音頭に成り庭口より清兵衛手拭にて手を拭乍出て來り（清）ヤレ〱手水場へは入たらいゝ心持に成た〇モシどなたも道を急ぎますからわしはモウお暇致します（畦）時に清兵衛どんわしらも一ツ所に（畦　田）行ませう（清）わしは急ぎの使故御免被成い先へ行ますト伊勢音頭にて向ふへ足早には入る（畦）是田五七酒は呑でも晝食を餘所で喰のも面倒とや（田）夫に腹も丁度お杉お玉持合した割籠の飯（久）奥の離れで辨當を上ッてござれお二人りさん（畦田）内儀の給仕に茶の花香（そよ）わしらは是から一拵ぎ（彦）姉ェ達はモウ行かへ（市）古市の旦那樣（源）そんなら客人姉ェもしつかり（百　萱　四人）御馳走に成ましたト右の唄にておそよお市は上の方へは入る畦六田五七は暖簾口へは入る跡三人殘り（彦）成程アノ人は正直者だ（源）いかに正直者だといつて五十兩と云金をあんな人に持してやるはけんのんな事だ（久）そこは正直の頭べに神舍るで間違ひもムりませぬのさ（彦）そりやアそうと喜兵衛殿はモウ見へそうなものドやねへかトやはり伊勢音頭にて久七奥へは入る是にて向ふより喜兵衛序幕の親仁脚半草履旅形り同ドくお蓮草履にて連立來り源八見て（源）キイ喜兵衛さん〱さつきから待て居た（喜兵衛）キヽ杉本の旦那源八さんお待遠でムりましたらう（彦）大ぶ手間どれたの（喜）今朝は宿の女が寢忘れて遲く成た其所

へ娘が髮を結つたので大きに遲くなりました（彥）そうしてお前の娘と云のは此子かへ（喜）左樣でムります○コレ娘わなたが杉本の旦那だトお蓮前へ出て（蓮）是は〳〵旦那樣でムりますか不思議な御緣でお世話樣に成りまするがふつゝかな者でムりますればお目懸られて下さりませいナ（彥）聞ば此古市へ奉公がしたいと云望だそうだが何も因緣は有めへの（喜）決て其氣遣ひはムりませぬ何を隱しませう此春から四五十兩負こくつて手も足も出ねへ所から三年計り拵で呉とこいつにいつたら拵ぎやせうからどふぞ其替り古市へやつて呉ろと達ての賴みわしが勝手に賣るのだからせめて所の塁位は聞てやらにやアならねへからそこで態〳〵紀州から此伊勢迄連て來たのだ（源）何で又姉エはそんなに古市へ來てへのだへ（蓮）サアちつと逢たい人が（源）エ（蓮）イエ相の山や二見が浦ゐ伊勢樣へ參りたさに夫でこつちへ參りましたわいなア（源）トキニとつさん是でいゝかへト源八喜兵衞の袂へ手を入思入（喜）アイよふムりますまア三年として置ませう（彥）夫ドやアとつさんこうせう源八が所が近所だからわれが所へいつて證文をしやう（喜）どうぞそうして下さりませ（彥）サア源八行ふせ（源）參りませう〳〵（彥）チイ御亭主〳〵勘定はいくらだへ（久）ハイ〳〵○ト云乍久七出て（ハイ御勘定は一貫四白六十四文でムりまする（彥）源八是を上ケて呉ト彥十郎一分銀を出して源八に渡す源八久七に渡す（源）ハイ御勘定（久）是は有難ふムります只今お釣を（彥）何其釣りは子僧どんにやつてくんなせ

へ（善）是は旦那有難ふムります（源）宿下りの小遣ひが出來たな（彥）サアそろ〳〵と出掛樣かトお蓮思入有て亭幕の帳を出し（蓮）どうぞ一目孫三郎さんに（源）何孫三郎（蓮）エ○ト向ふへ思入有て（サア馬士の衆が向ふから（喜）あれが三方荒神だ（蓮）そうでムんすかいなト此時ばつたり帳を落す彥十郎拾ッて（彥）ヤ此帳面は（蓮）エト引ッたくり懷へ入る（源）玉帳かいゝ手廻しだの（彥）サア行ませうト伊勢音頭にて彥十郎先にお蓮源八喜兵衞上手へは入る（善）モシ親方其釣を早くおくんなせへ（久）エヽ世話しねへ遣ねへとはいはねへはト早めたる伊勢音頭ばた〳〵に成り向ふより以前の清兵衞一散に走り出て來る（清）ヤイ〳〵久七殿イヤサ久七こなたは〳〵いけぶとい人だなト胸を叩き息の切る思入（久）コレ清兵衞さん見相ウ變てコリヤまアどふさつしやつたのだ氣を落付さつしやい（清）何だ氣を落付ろどふ落付て居られるものだ（久）藪から棒に腹を立てまア譯を云つしやりませ（清）エヽ盜人たけ〳〵しいと譯は云ず共覺へがわらうト清兵衞せき込で云（久）何だか知らぬがそう急ずと靜に譯を云つしやりませ○コレ小僧水を一ッ上るがいゝ（善）アイ〳〵○ト茶碗へ水を汲で（汲立を一杯お上ん被成さいト清兵衞の前へ出す清兵衞取て心付たる思入にて（清）エヽ痲痹藥を呑そうと思つて其手をうつかり食ものかト茶碗を取てほふる（久）是サ清兵衞さんコリヤまアどふしたと云のだ（清）どふもかうも入る物か太々の金の五十兩出して下せへ（久）何わしに出せとは（清）盜んだから出せと

云のだ（久）イヤ此人は〳〵途方もない事を云人だ（善）何でおらの所の親方が盗人な（清）まゝ金を盗んだから盗人だサア金を出せ〳〵ト清兵衛やかましく云此内奥より以前の畦六田五七出て此体を見て（畦）是々清兵衛どの〳〵どふしたのだ〳〵（田）まア静にさつしやい〳〵（清）まゝ村の衆か聞て下せへ太々の金の五十両をアノ久七が盗だわいの（畦 田）ヤア何久七が盗ンだとト両人驚く久七むつとして（久）コレ清兵衛殿外の事とは譯が違ふいつわしが金を盗ンだ夫を云はしやい〳〵（清）云ねへでどふするものださつき手水場へいつた時お伊勢様へ納る金故不浄場で汚すまいと手水場の脇に積で有た麥の中へ財布の儘突込で置ては入つたが出てから見れば其儘故首へ掛て出掛たがごまの灰に取られまいと道〳〵金を探つて見たら小判と格好の違ふのに悔りして出して見れば是此様な丸石だ○ト財布から石を出して見せ（庄屋様の内を出てから爰へ休んだ計つかりだ麥の中へ入て置内こなたが盗だに違ひないサア其金を返さつしやい〳〵（久コレ清兵衛殿そりやアこなた何を云のだわしが盗だかぬすまぬか能物を積ッて見さつしやいさつきわしが何と云たお前が金の噺しをした時爰だからいゝけれど脇でそんな噺しをさいしやるな胡摩の灰に取れるとわしがこなたに意見をしましたせ然も二人りの衆も聞て居られたが其金を取位なら取られぬ様に用心しろと何でわしが云物か能考へて見さつしやいな（清）イヤ〳〵何も考へて見るには及ばぬ庄屋様から出て外へ休まねばこなたが取たに違ひない〳〵（久）是

やくら盗だ〳〵といはつしやつても盗まぬと云證據があるこなたが手水場へいつた内わしやア奥へは行はせぬ此店に計りいたお前は手水場へ行た故知るまいが二人りの衆が御存だ大方どこぞで噺しをしてごまのはいに取られて仕舞云譯なさに爰へ來て云掛りをさつしやるのだ正直〳〵と人はいふが見掛に寄らぬ太い人だト久七腹を立て云清兵衛猶せき込し思入にて（清）何ドやわしが太いコレ盗だ方がふといか盗まれた方がふといか出る所へ出て云きにやならぬサア代官所へうせおらうト久七の胸ぐらを取る（久）ヱヽ何をしやアがる○ト拂ひ退て清兵衛を引据へ（コレ弱イ商賣をしているからさつきから虫を堪へ下から出りやアいゝかと思つて喰へそばへた事を云な人様の物銭三文かすめた事のない久七盗人といふ悪名を付られちやア了簡ならねへそつちよりこつちから代官所へそびいていつて白イ黒イを譯にやアならねへおれと一所におゆびアがれト清兵衛を引摺ッて行ふとする畦六田五七是を見て（畦）コレ〳〵久七殿まア待つしやい腹の立のは尤だこなたが金を盗まぬ事はわしら二人りが證人だ（田）成程さつき清兵衛が手水場へいつた其内は久七殿は見世に居た誰一人あの時に奥へいつた者はない（畦）シテ見るとコリヤ清兵衛こなたどこでか取られたのだらう（田）但しは庄屋様へ忘れてゞも來はせぬかよふ思ひ出して見るがいゝ（清）何の庄屋様へ忘れて來るものか爰で取れたに違へない又脇で取れた物を爰で取れたなぞと云そんな清兵衛ドやアムりませぬ（畦）そりやア正直清兵衛と云こなたの事だからまさか

嘘もつくまいが（田）又久七殿が盗まぬ事はわしらが急度見て居たのだ（清）エヽこなた衆も頼毋敷ねへ何で久七が肩を以てわしをこんなにへこますのだ假令小前の百姓でも同ト村に居るからは肩を以て呉たがよい（畦）何ぼ肩が持度てもこなたの方が無理だものを（清）何が無理だな盗だから盗だと云のだ（田）そんなら何ぞ證據があるか（清）サア何も證據はないけれど爰で盗れたに違ひない（畦）夫だから無理だと云のだ盗まぬと云久七殿にはわしらと云證人が有に（田）こなたの方には盗まれたと云何も證據がないではないか（清）サア（田）夫見さつせへ證據がなければ水かけ論代官所へ持出してもこなたに疑ひが掛るわいの（清ヽ夫だといつて爰の内で盗れたに違ひないものをそんな事を云れてはおりや悔しくて〳〵ならぬわいト清兵衛悔しき思入涙を拭ふ（田）コレ〳〵清兵衛そんなわからぬ事を云な踵田村の者はこんな者かと思はれるのが恥かしひ（畦）村中の恥になる事だよふ考へて見さつせへなト兩人煙管を打き立ていふ清兵衛むつとせし思入にて（清ヽハイお前方に恥をかゝせて大きにわしが悪かつた何ぼ小前の百姓だ迚そう一ト口に込メさつしやるなお前方の恥になつて悪けりやア是から一ぺん村へ歸つて庄屋樣を連てわしが潔白を見せにやならぬト清兵衛上の方へ行掛るを兩人留て（畦）是清兵衛まア待テわしら二人りも掛り合だ（田）どうでこなたの云のは分らぬわしが行つて咄してやらう（清）エヽこなた衆を頼むものかへ〇ト兩人を振り切久七覺ていろよトやはり伊勢音頭にて清兵衛いつさんに上手へは入る（畦）エヽコレ清兵衛待と云ふに（田）ハテ扨强情な男だなト久七思入有て（久）是は〳〵お二人りさん大きに有難ふムりました外の事と違ひましてどふもこればかりは（畦）其腹立は尤だが盗まぬ事はわしらが承知此事を庄屋殿に咄してこなたの明りを立るからいひ分もあらふけれどとふぞ二人りに（兩人）任して下され（久）そりやモウ身の明りさへ立ますれば別に申事もムりませぬ（兩人）そんならわしらに任して下され（久）宜しふムりますお得意のお前樣方へお任せ申ませう（畦）夫は早速に忝なひ（田）いづれ後方又來ますト兩人下手へは入る（善）親方譯らないやつでムりますね（久）あんなべら坊なやつはない折角人が深切にごまのはいに取られるなと氣を付てやつたのをどこでか金を盗まれておれに罪をきせるとは正直所かふといやつだ〇ト久七煙草を呑腹立紛れに丆首を口へ入（アッーー（善）コレ親方そりやア丆首だ（久）エヽ知つているいへト善太の天窓をきせるでくらわす（善）アイターー（久）こんな腹の立〇ト煙管で灰吹を打くを木のかしら〳〵事はないト伊勢音頭にてよろしく

ひやうし幕

○上總綿小紋單地

序幕

姉ヶ崎濱邊の場
次郎兵衛門外の場

一 小島次郎兵衛
一 小鼠忠次
一 岩崎運藏
一 百姓甚九郎
一 百姓　六八
一 宗兵衛後家お澤
一 市兵衛娘お梅

一 百姓市兵衛
一 秣原主水
一 百姓九左衛門
一 藪際の虎藏
一 市兵衛女房お賤
一 次郎兵衛悴千之助

本舞臺波手摺向ふ上總沖の遠見上の方岩の張物此影より五大力船の艫を見せ上總の國姉ヶ崎濱邊の体爰にお澤やつし形り少し更たる後家の拵へ九左衛門百姓の拵へ介抱して居る傍に○△中通りの百姓四八立掛り居る波の音にて幕明く

（九左衛門）コレ〱宗兵衛後家其歎きは尤だが次郎兵衛が遠島にならつしやるのも約束事氣を取直して（四八）泣ッしやるな〱トお澤涙を拭ひ（澤）それドやといつてあの樣な

慈悲深ひ名主殿を遠ひ所へ遣と云も元はと云ば悴が鹿忽猪と間違ひお住殿を鐵炮にて打たが誤り怪我とはいへ九左衛門殿こなたへも氣の毒で顔向がならぬわいの（九）イヤ何も是が殺す氣で打たと云譯ではなし田畑を荒す手負猪打殺せば村々の助になる故殺そうとお法度の玉を籠打たが誤りとう〳〵きのふ宗次郎殿も不便や死罪嘸殘り多ひ事でムらう（澤）何を云にも親一人り子一人りの宗次郎成ば誰を力に致しませう心細ふてなりませぬ（九）チヽそりやおれ迚も同ト事便りにする者がない故そなたの心は察して居ます（〇）村中毎日替り〳〵猪小家へ出る番人もあの日の役に當つが宗次郎殿の身の不運（△）附ては不斷鐵炮へ玉を込て打のが御法度しらぬ事も有まいが猪を殺して村中を助る心で打た鐵炮（□）情が却て仇となりまだ年若なお住女郎宗次郎殿も非業な最期（※）其鐵炮に小島と云名主殿の焼印が押て有たで遁ぬ科（╳）既に同罪にもなる所萩原様のお慈悲にて遠ひ所へ流し者（▲）何が惜ひといつた迚こんな惜ひ事はない又と二人はない人だ（九）そりやこなた衆の云通り又と二人りはないお人名主はすれど權威は振ず下を愍み慈悲深く實に所の柱故どふか疵の附ぬ様村中擧ッて代官所へお慈悲願ひに出たれど何を云にも人一人り殺した事故お上みでもお助け被成る譯にもいかず宗次郎殿は死罪と成り次郎兵衛殿は流し者（澤）此身につまされお隱居の徳入様やおかみ様がお最愛しふムりまするト時の太鼓に成り向ふより運藏野袴ぶつさき羽織大小甚九郎羽織ふんごみ虎藏遊人の形り若イ衆の仲間床几を持附

深出て來り花道にて（運藏）甚九郎いまだ主水殿は見へぬ様だな（甚九郎）左様でムります氣の長いお人故滅多にお出はムりますまい（虎藏）夫に名主の次郎兵衛が不斷から御贔負故けふの船出を遲くなる様態と延してムりませう（運）所を身共がせり立て手ひどひ仕置を見せて呉るト又時の太鼓にて皆〳〵本舞臺上手へ通る九左衛門前へ出て（九）是は〳〵岩崎様にはお役目御苦勞に（皆々）存ドまするト運藏見渡して（運）チヽ九左衛門始めそち達は組頭の者共だな（皆々）左様にムりまする（運）調度幸ひ能イ所だそち達に申渡すが次郎兵衛お咎蒙る上は今日より名主役甚九郎に申附る左様相心得イ（九）へヽエスリヤ甚九郎殿が（皆々）名主役をト皆〳〵顔見合せ困つた事だと云思入（甚）イヤ次郎兵衛は間抜故村の締りも寛かせだつたが是からおれが洗ひ替目の玉の飛出る程嚴しくするからそう思へ（皆々）へイ〳〵畏りましてムります（虎）御代官の岩崎様と心のあつた甚九郎様ごまをすらねば身の上だぞ是から村の隅からすみ迄惡ひ事をほドくり出すはごけへほりのおれか役コレ宗兵衛後家おれに一ッ白眼れたらモウ此村にやア居られぬぞトお澤の袖を引を振拂ひ（澤）アイどうで悴が死だからは跡を讓る者もなし僅かな田畑を賣て仕舞回國にでも出る心村に居る氣はムりませぬ（虎）そりやア惡い了簡だ先祖から傳はる内を捨ずとおれを入夫にして跡を立たがいゝドやアねへか（澤）イエ〳〵悴がないからは内も何もいりませぬト九左衛門思入有て（九）ヘイ〳〵岩崎様へお願ひがムります（運）願ひとは何

だ（甚）コレ〳〵九左衛門爰に名主が扣へて居るに直に願ふは失禮千萬なせおれへ願ぬのだ（九）是は〳〵麁相を致しました扨お願ひと申まするは只今是へ次郎兵衛殿が參りましたら一同に暇乞が致したふ厶ります故お願ひ被成て下さりませ（甚）イヤ其義は罷りならぬ願ふなら願ふ樣に○なア申運藏樣（運）チヽ筋道立て願ひなば免して呉まい物でもないが○其方共には許されぬ（九）スリヤ暇乞は（皆々）叶ひませぬか（虎）素手の孫三で叶ふものか（九）ハテ是非もない（皆々）事だなアト皆〳〵思入時の太鼓に成り向ふより主水野袴ぶつさき羽織大小若イ者仲間床几を持出て來る跡よりお賤世話女房好の拵へ抱子を抱キお梅の子役やつし形り抱子を脊負千之助の子役指やつしにて附添出て來り花道にて（賤）ヘイ〳〵お願ひの者で厶ります（主水）ムヽ其方は先達て姉ヶ崎の次郎兵衛が慈悲願ひに出し召仕の市兵衛が妻ドやな（賤）左樣に厶りまする市兵衛が妻賤と申ます者に厶ります（主）シテ願ひとはいかなる子細だ（賤）今日主人次郎兵衛事此濱邊より伊豆の國へ流されまするを承り何卒忰千之助是なる水子に親子の別れ暇乞が致させたく召連まして厶りまするお許し被成て下さりませうならば有難ふ存ドます（主）流罪の者に對面は叶はぬ事ではあるけれど役柄の次郎兵衛故そちが願ひは聞届ケた（賤）スリヤお聞届下さりますとか（皆々）有難ふ厶ります（主）シテ又市兵衛はいかゞ致した（賤）斯る事とも存ドませず餘義なき用事で下總迄參りまして厶りまする（主）最早是へ引出せば濱邊へ參つて

待て居やれ（賤）有難ふ厶りまするト時の太鼓にて舞臺へ來りお賤下手へ扣へる百姓皆〳〵能來たと云思入（主）是は〳〵岩崎氏にはお早き御出張御苦勞千萬に存まする（運）先刻より是へ參り貴殿のお出を相待おつた（甚）萩原樣にはイザ先何れへ（主）岩崎氏御免下されト運藏の次キへ床几に掛る（運）シテ只今あれへ召連られし乳呑を抱きしアノ女は（主）今日流罪申附し次郎兵衛が召仕市兵衛が妻で厶る（甚）シテ又市兵衛が女房を（虎）何故お連被成ましたな（主）主人次郎兵衛舟出と聞暇乞を願ふ故差許して召連ました（運）イヤ其義は罷り成りませぬ（主）なぜ成りませぬな（運）大罪人の次郎兵衛に仕へし者はいはゞ同類曲事に申附べきを情を以て許し呉るに夫に暇乞の何のかのと慈悲をすれば何とやら其義は無用に致されい（主）デハ厶らふが次郎兵衛も舊來當地へ住居なし村役をも勤めし者身寄の者に暇乞許して遣ても宜しふ厶らふ（運）ムヽト思入是にて九左衛門始め皆〳〵出て（九）ヘイ〳〵萩原樣へお願ひが厶ります（主）何事ドや（九）今日流罪になりまする村名主次郎兵衛には年來世話に成ましたれば村役の者一同暇乞を致したふ厶りますれば何卒お免し下さりませう（皆々）お願ひ申上まする（主）チヽ苦しふない暇乞を致せ（皆々）有難ふ厶りまする（運）アイヤ〳〵身寄の者さへ成難きに何故有て村の者迄（主）舊恩を思ひ次郎兵衛に暇乞を致し度と百姓共が我への願ひ人は斯こそ有り度もの神妙なる願ひ故拙者が免して遣しますト運藏甚九郎と顔見合せ馬鹿なやつだと云思入此時向ふ揚幕

にて（捕手）四人おゆめト此聲を聞（賤）最早爰へ旦那樣が（九）アレ〳〵引れて（皆々）
ムらつしやるは（甚）エヽかしましい靜まり居らぬか（皆々）ハアヽト皆〳〵情ないと云
思入時の太鼓せつきやう摸樣の合方にて向ふより次郎兵衛好の拵に小手をゆるし繩に掛り
若イ衆黒四天の捕手二人繩をとり同じく半天股引大小の侍二人附添出て來り花道へ留る次
郎兵衛思入有て（次郎兵衛）實に人間の一生はいつ何時禍ひの其身に掛るか知れぬ者譬へ
にも云月に雲暫しの闇に猪とのみ思ひ違ひてお住をば打たる科に宗次郎あすはの神の助ケ
もなく冥途の旅へ立しと聞我も夫故波濤を越へ生れし土地を放れ島けふ出船して又いつか
古郷へ歸るもしら波の念れ身に知る秋の暮袖さへ濕る汐風に見馴し濱の見納めなるか〇ト
愁ひの思入有て（當所の名殘に思はずも各々樣のお足を止お免ン被成て下さりませト又時
の太鼓に成り舞臺へ來る（千之助）ヤとゝ樣かト行ふとするを（賤）アモシお靜かに被成
ませト抱留る次郎兵衛兩人を見て思入皆々下手へ出て（九）次郎兵衛殿みんな（皆々）爰
に居りますぞ（甚）エヽ又しても〳〵出しや張ずとすつこんで居ろト此内次郎兵衛皆〳〵
を見て市兵衛がなぜ居ぬかと云思入（捕手）下におらうト是にて舞臺莚を敷是へ次郎兵衛
住ふ時の太鼓打上ケ主人思入あつて前へ出（主）コリヤ次郎兵衛（次）ハッ（主）其方義
兼〳〵在方にて玉込致し候鐵炮猥りに打候事禁じ置候に猪おどしとは申乍宗次郎に玉藥共
鐵炮相渡し候段不埒の至り候右宗次郎存せざる事乍九左衛門娘住を打殺し候故死刑に相成

候其方事も同罪たるべきを格別の慈悲を以て伊豆の國へ流罪申付る者なり有難くお受致せ
（次）ハッ抑々召捕に相成しより一命はなき事と覺期致しおりましたるに格別の御慈悲に
て一命をお助ケ下され流罪仰付られまして有難ひ仕合に存奉りまする（主）流罪の趣き申
渡せば繩目を免しやれ（捕）ハット繩を解（主）夫次郎兵衛身寄の者共夫へ出て暇乞を致
せ（賤）ハッ有難ふムりまする〇ト誂への合方に成りお賤千之助お梅跡に皆〳〵附て前へ
出て（旦那樣しづめでムりまする（次）チヽお賤か能來て呉たな（千之助）とゝさまト傍
へ行兼るを（主）苦しふない傍へ行きやれ（賤）ハッ夫お免し成ばお傍へ早ふ（千）おな
つかしふムりますト千之助次郎兵衛にすがる（次）コリヤ千之助御隱居樣は御一所ではな
かつたか（賤）ハイ御隱居樣には旦那樣が獄屋へお出被成てより夫を氣病にお煩ひ御大病
ではムりますがお暇乞と存ましてお駕の仕度も致しましたがなまじ逢たら病の障り逢たい
は山〳〵なれど行ぬ程に呉〳〵も體を大切に命を保ち再び古郷へ立歸りまめな顏を見せて
呉とおつしやてゞムりました（次）ムヽスリヤ親仁樣には御大病とか其お煩ひも皆おれ故
生先短イお年寄に御苦勞掛る不孝跡アヽ濟ぬ事ではある〇シテ市兵衛が見へぬが是もどう
か致したか（賤）イエ夫トは達者でムりますが斯る事共存ませず御新造樣のお里迄一昨日
參りまして是非今日は歸ります筈今にも途中で聞ましたら宙を飛で參りませうどうぞあな
たのお出の内に市兵衛にもお暇乞を致させたふムります（次）チヽおれも逢た其上で賴み

罷事もあれば早く歸つて呉ればよいが（賤）遲くもけふの晝迄には歸りますと申ましたれ
ばモウ只今に歸りませう（次）どうか逢ふて行度ものだト次郎兵衞延上り向ふを見る皆
〳〵も思入有て（九）イヤ次郎兵衞殿跡々の事ならば必ず案事さつしやるな惡ひ様には
（皆々）致しませぬ（次）チヽ九左衞門殿始め皆の衆何分共に頼みますト甚九郎思入有て
（甚）イヤ申岩崎様俄に風も追手に替り御出船には最屈竟（虎）早いが宜しふムります
（運）何様船路は風次第順風とあるならば○夫者共次郎兵衞を元船へ（捕）ハツト立兼る
を（運）エヽ切り〳〵と致さぬかいト急度いふ（主）アイヤ岩崎氏お待被成い（運）又留
さつしやるか（主）當所より流罪の者は申の刻に出船なすが古例なれば今半時猶様致す其
内には○イヤ猶様致すも上みの情（運）そりや古例でもムらふが陸路と遊つて海上は風に
任さにやならぬもの（主）其義も一理ムれども古例は則鎌倉天下頼朝公の嚴命なるが夫をも
といて濟ますか（運）サアそれは（主）都て公の政道は古例を守るが御法でムる（運）
爰におるのもたいくつだ小家へ參つて休息致そう（甚虎）夫が宜しふムります（運）然
らば萩原氏（主）岩崎氏（運）後刻お意得ませうト時の太鼓に成り運藏先に甚九郎虎藏附
て上手へは入る跡合方に成り主水次郎兵衞の傍へ寄り（主）コリヤ次郎兵衞申置べき事で
も有ば年頃入魂に致せし某何ンなり共遠慮なく（次）ハヽ有難き共仰せ斯成まして別段に
願ひ申事とてもムりませぬ此次郎兵衞跡〳〵の事頼むべき市兵衞に逢ませぬのが只殘念に

ムりまする（主）夫れも只今に歸られぬ共申されぬ申置へき事なくば身共が居らば何かと
遠慮暫時休息致す間暫しなり共心置なく暇乞を致したがよい（次賤）有難ふムりますす
る（主）こりヤ九左衞門始め皆の者そち達も遠慮なく（皆々）ハヽ有難ふムりまする（主）
イザ警固の者は身共と一所に（捕侍）デモ四人一人置（主）ハテ放しがいに致し置共逃
隱れ致す様な次郎兵衞ではないぞ（捕侍）ハツ（主）心靜かに名殘をおしめト時の太鼓
に成り主水先に侍二人捕手二人附て上手へは入る皆〳〵跡を伏拜み（九）扨次郎兵衞どの
此度はとんだ事になりまして申そう様もムりませぬ（次）猪威しの鐵炮から二人り迄命を
拾數代名主を勤めたる此次郎兵衞もけふ限り遠ひ島へ行ねばならぬ（澤）夫も悴が鹿忽に
てお住殿を討たる故お恩に成た旦那様が爰にお出被成られぬ様に致しましたかと思ひます
と何共か共申様がムりませぬ（九）アコレ〳〵宗兵衞後家共云譯をいつた日にはいつ迄い
つても果しがない却つてお歎きを増様なものだト此内始終次郎兵衞向ふへ思入有て（次）お
賤まだ市兵衞は歸づて來ぬな（賤）何でおそい事でムりますかあいにく共何共かとも申様
がムりませぬ（次）此身が流罪となる上はモウ此土地の住居もならぬ今夜直に引拂い何れ
へなりとも行ねばならぬ是と云縁者もなければ頼みに思ふは市兵衞計り跡の事をば頼み度
がなぜ歸つては呉ぬ事だぞ（賤）イエ共事ならばお案事被成ますな此間も市兵衞が若しもの
事の有た時はどうで爰にも居られねばお家内のお供して先鎌倉へ一先行以前村のお人故長

谷小路で名の高ィ元結屋の文左衛門樣へ何かの事をお賴み申旦那樣のお免しになる迄お不
自由はさせ申さぬと申てヾムりますれば跡はお案事被成まするな（次）忠義者の市兵衛故
定めてそうとは思へ共一言は賴み置たい〇イヤ千之助もお梅も能來て呉たな〇親仁樣は病
氣と有るにお出被成ぬのも尤ドやが女房はいかゞしたな（千）アイおつかさんはトいは
ふとするを押へ（賤）アモシト千之助を留ておかみ樣はト涙を拭ふ（次）然も當月臨月な
りしが身二ッになつたかな（賤）ハイ當月七日に御安產でムりまする（次）我事を苦勞に
なし產後のなやみに〇なからうな（賤）エトお賤悔りなす（次）イヤサお滿は死ンだであ
らふなト皆〱愁傷の思入（賤）御存の上からは何をお隱し申ませうお產は首尾能有たれ
ど七夜の內に血が上り墓なくお成り被成ました（次）チヽそうあらうと思つて居た死だは
然も七日の夜七ッ前であらふな（賤）エ誰があなたへ其事を（次）誰もいはぬが獄屋の內
過ぎこし方を思い寢に夢共なくうつゝ共なくあり〱見たる女房お滿只一ト言の詞もなく
さめ〲泣て居たる故いかなる譯と樣子をば問はんとなしたる其折から七ッの鐘に夢覺め
てあたりを見れば何もなし扨は女房は產後にて死だと思ひ念佛を朝夕唱へてやつたるは
（賤）あなたに逢たい〱と夫計りをおつしやつて墓なくお成り被成ましたがやつぱり此
世に氣が殘り獄屋へお出被成たか（九）迷ふてお出被成たも（澤）さら〱無理ではムり
ませぬ（皆々）アヽお最愛い事でムりますなア（次）シテ抱イて居る其水子は（賤）あな

たのお胤でムりますトお賤抱子を出す（次）チヽそんなら是が〇ト抱子を抱キ取り（コレ
女か男か（賤）ハイお孃樣でムりまするト次郎兵衛抱子を見て愁傷の思入（次）不便やよ
しない所へ舍り生れ身に母に別れ又もや父に別れる不運再びそちにも逢れぬかモウ是限り
に逢れぬか生死知れざる我身の上けふが則親と子の逢初めの逢納め〇ト涙を拭ひ氣を替て
（お賤お滿に能似て居るな（賤）お小さいと大きい計り瓜を二ッでムります〇トお賤抱子
を抱取思入有て（サア千之助樣おとゝとなしふおとつ樣へお暇乞を被成ませ（千）アイおと
つ樣お機嫌宜敷ふお身を大事に被成ませ（次）チヽおれも身を大事にするからそちも體を
大事にして煩はぬ樣にしやれよ是からは市兵衛やお賤を實の親と思ひ能云事を聞ふぞ（千）
アイ〱（次）お賤市兵衛は未だかな（賤）ハイまだ見へませぬわいナ（次）アヽ市兵衛
も厄介だが取譯てお賤が難義親仁樣ハ御老衰お手の掛る其上に水子は二人り悴と娘よまん
どしかゝんどんに其世話はどの位ひよんな所へ緣を組よしない苦勞をしやるのふ（賤）勿
體ない事おつしやります是迄長〱旦那樣のお世話に成た市兵衛夫婦御恩送りは是から先
キ假令どの樣な事がムりましても命の限り私共がお世話を致しますわいナト宜敷思入時の
太鼓に成り上手より主水運藏侍二人捕手二人甚九郎虎藏附添出て（運）最早未の下刻なれ
ば（主）名殘惜くも出船致せ（次）畏つてムりまする（賤）そんなら是がお別れでムりま
すか（皆々）お名殘り惜ふムりまする（次）アヽ左程の世話も致さぬに我を慕ふ村の人

〳〵○是に附ても市兵衛にト向ふへ思入（運）エヽ何をぐず〳〵よまい言疾〳〵乗船致さぬかト此時揚幕にて（忠次）暫らく〳〵お待下さりませ（運）何とト波の音ばた〳〵に成り向ふより忠次紺の腹掛脚半わらぢ三尺帯尻はしより旅形り菅笠を持出て來る是を三階黒四天の捕手二人掛り立廻り乍出て（捕手）コリャ願ひあらば我〳〵に申せ（捕）直訴は叶はぬ跡へ返れ（忠）どうぞ通して下さりませト兩人を突退け立廻り乍舞臺へ來り兩人を突倒し下に居る（運）ヤア留るも聞ず刑罪場へ推參なすは憎くいやつ（甚）誰かと思へば其方は當所を搆ひの小鼠忠次（虎）何故爰へうせたのば（忠）ヘイお願ひが有て參りました（甚虎）なんとト次郎兵衛に向ひ（忠）旦那樣飛だ事でムりましたな（次）思ひ掛ない小鼠忠次そちは上總一國をお搆ひの身であり乍お免もなきに此所へは（忠）サア來られぬとこ故旅姿脚半草鞋で參りましたは萩原樣へ折入てお願ひがムりますゆへ（主）何某に願ひとはト訛への合方に成り忠次思入有て（忠）外の事でもムりませぬが爰に居なさる次郎兵衛樣猪おどしの一件ッで遠島と聞た故お搆ひ場所も合點で脚半草鞋で參りましたは先年芥場の野でんから大喧嘩を致しまして簀卷にされてどんぶりと沖へ沈めに掛けらるゝのを次郎兵衛樣のお情で危ひ所を助つた命の親のお恩送り遠ィ所へ私を替りに遣つて下さりませ○科と云のも次郎兵衛樣がなした事ではムりませぬがお法破りの事なればどんなお仕置受樣共それやァ仕方はムりませぬが此近郷で慈悲深くなくてならなへ名主殿土地の難義になりますからお助被成て下さりませト忠次宜敷思入にて云（主）ヤァ科ある身にてお搆ひの場所へ立入る不屆やつ其分には致されねど一旦命を助けられし恩義を思ひ次郎兵衛が流罪の替りになしくれと神妙なる願ひに依て此度は差免すぞ早く此場を立去ふぞ（忠）夫トやァわつちがお願ひは（主）人替りの義は罷りならぬ先達てより次郎兵衛が召仕の市兵衛が主人の替りになし呉と再度願ひ出たれど罪科の仕置を代りにて濟といふがあらふと思ふか（忠）そんならどうでも（運）エヽしちくどいならぬと云に（忠）エヽおめへ樣に賴みやァしませぬト次郎兵衛思入あつて（次）一旦ッの恩を忘れずして其身を惜まず次郎兵衛が替りに島へ行ふとは忘れは濟ぬ添ひない夫に引替是迄に世話を致せし甚九郎其恩をも辨へず（甚）何世話をしたとは何が世話是迄こなたにいゝ樣にこめられて居た甚九郎人に情を掛るものかこんな憂目にあふものか（虎）そふだ〳〵村の司をかさに着て小前の者をこめるから果は報ひで島へ行喰ものさへも食ねへのはみんな其身のなした罪だ（甚）人を恨むな我身を恨め（主）甚九郎扣へイ（甚）デモ役柄の私へ（主）コリヤ上ミ下モを憐むが是五常の道なるに其方如き無慈悲の者には名主役は相成らぬぞ（甚）デモ先刻岩崎樣より（主）岩崎殿が御承知なら身共はどうでも能イと云のか（甚）全く以て（主）出過ぎ者め扣へおらう（甚）へゝイト扣へる時の鐘鳴る（運）そりヤこそ七ッだ船出の時刻最早猶豫は相成らぬぞ（賤）そんなら是が（九澤）お名殘でムりますか（四人）アヽ別れ共ない

〳〵ト四人わァ〳〵と泣（次）皆の衆にそういはれるとわしも名殘が惜ふムる（運）エヽ叉してもぐづ〳〵とよまい事疾〳〵乘船致さぬか（虎）是と云のも百姓共わいらが名殘を惜しむからだ下れ〳〵（主）コリヤ〳〵かしましひ扣へぬか（虎）夫だと申て（主）ハテ一ヶ村のたばねをなし下を憐む次郎兵衛名殘を惜むは尤ドや妨げ致すは不仁の仕方○夫そやつめを追拂へ（百皆々）畏りましたト皆〳〵立掛る（虎）こいつは溜らぬト波の音に成り虎藏を逃出すを皆〳〵追立る虎藏下手へ逃ては入る（主）コリヤ次郎兵衛○市兵衛に逢はいで殘念であらうが最早出船の時刻延引なさば我〳〵が落度名殘惜くも乘船致せ（次）ハツ返す〴〵も御懇のお意有難ふムりまする（運）夫者共猶豫致すな（捕）ハツト立掛る（賤）そんなら是が（皆々）お別れでムりまするか（次）時節があらば逢ませう（運）エヽきり〳〵と引立イ（捕）ハアヽト時の太鼓誂への合方にて捕手次郎兵衛を引立る千之助袖へすがりお賤抱子を突付名殘を惜む思入是を捕手拂ひのけ次郎兵衛を船へ運ては入る主水不便なと云思入次郎兵衛船のともへ出向ふへ思入（賤）左樣なれば旦那樣（千）おとつ樣（九）次郎兵衛殿（皆々）達者でお出下さりませ（次）モウ何にも云て下さるな（運）エヽ百姓共下りおらぬか（皆々）ハアヽト此時千之助ツカ〳〵ト行を甚九郎襟がみを取りむごく引退る忠次うぬと立掛るを九左衛門留る次郎兵衛是を見てツカ〳〵と小べりへ出るを（捕）下におらふト引すへる次郎兵衛とふぞ成る波の音の頭を嚴重く打込み船を上手岩

の影へ引込む皆〳〵ハアヽト泣伏（運）コリヤ〳〵いくら泣てもわめいても此場に及んで返らぬ事だ（主）次郎兵衛出船の上からは最早當所の住居はならぬ今宵の內に立退きやれ（賤）畏りましてムりまする（運）猶豫はならぬぞ（賤）ハツ（甚）御兩所樣にはお役目濟ば常願寺へお出有て御休息遊ばされませふ（主）いか樣休息なして立歸らん（運）然らば秣原氏（主）先〳〵お先へ（運）御免ン下されト時の太鼓に成り運藏主水仲間附て下手へは入る跡皆〳〵向ふへ思入あつて（賤）此市兵衛殿はどふしたのかなぜ戾ッて來ては呉ぬぞいアトな波の音ばた〴〵に成り向ふより市兵衛肌脫脚半草鞋にて走り出て來り花道にて（市兵衛）そこに居るのはお賤か（賤）チヽ市兵衛殿か（皆々）待ッて居た〳〵トやはりばた〴〵にて市兵衛舞臺へ來り息の切し思入にてどふと成り（市）コレ水をいつぱい呉〳〵（賤）アイ〳〵○ト番手桶の水を柄杓にて酌來る市兵衛呑み息を吐く（エヽこちの人遲かつた〳〵わいナ（市）何遲かつたと云からはもしや旦那樣は（賤）一足違ひでたつた今（市）エトきつくり思入（賤）御乘船被成ましたわいナ（市）スリヤ御出船被成たとかホイトがつくりと成る（九）コレ〳〵市兵衛殿沖の方を見やつしやれアレ〳〵アノ船が（皆々）夫でムるわいのト市兵衛後ろを急度見て（市）あの船でムりまする○モウ一足早く來たなら旦那樣のお目に掛られるのに僅かな後れでいすかとなつたか○此上は跡退ひ掛てト海へ飛入ふとするを九左衛門留て（九）是はしたりめつそうな是が五町か十町なら泳

ひでも行樣けれど丁度追手に受たれば最早船は一里から（〇）なんぼこなたが泳ぎを知つても（△）中〳〵追付るれ事ではない（皆々）思ひ止つたがよいわいのト九左衛門始め皆〳〵留る市兵衛向ふへ思入有て（市）いか樣追手に船足早く今迄白く見へた帆も入日と共に影もなく一里と思ふ其内にモウ二里から走ッたわへ〇トはいなき思入にて下に居て（九）ジテまアこなたは此中で（澤）何用有て（皆々）ムつたのだ（市）サア春迄船は出ぬと聞斯いふ事と知らざればなくなられたおかみ樣のお戒名と齒骨をお届ケ申に下總の佐倉のお里へ參つたついで僅かな道故成田へ廻り旦那樣のお身の上を一心籠てお願ひ申お鬮を取ば大凶故南無三方と又願ひ頂くみくドも同ド番籤ふたのは勿體ないと直に夫から取て返し急ぐ途中で足を痛め一晩餘計に泊つた計り旦那のお目に懸らぬが殘念で〳〵なりませぬト此時下手へ忠次前へ出て（市）市兵衛さん久しぶりでムりますな（誰）ヲ、こりや誰かと思ふたら忠次殿か何でこなたムつたのだト合方に成り（賤）コレこちの人よふ禮を云て下さんせ旦那樣の身替りに行ふと云てムんしたわいナ（市）何旦那樣の身替りとは（忠）おめへも知つて居なさる通芥捨場の野でんから大喧嘩の有た時覺悟にされて流される所次郎兵衛樣の一言で危ひ命を助つた御恩返しにわつちが替つて行ふと思つて態〳〵來たが夫も叶はぬ上の御法度おめへもはいなからうが又旦那もどの位はいねへ事だか知れやアしねへ（市）人は見掛に寄ぬもの能其恩を忘れずに替りに來て下すつた假令替りに行ず共其志し

が何より忝ふムりまするト波の音に成り下手より甚九郎出て來り（甚）コレまだぐず〳〵して居るのかたつた今立退ケと運藏樣の嚴しひ云付きり〳〵と立退ぬか（忠）又四文と出やアがつたか（市）こなたもおれと同ド百姓いらぬ差圖をさつしやるな（甚）イヤ同ド百姓とは何の事だわれは知らぬがけふからは次郎兵衛が跡役で村の司の甚九郎當所の者はどいつでもおれが支配を受ねばならぬぞト急度いふ（市）エそんならこなたはけふからして（甚）姉ケ崎の名主だは（市）ムウ名主とあれば聞ねばならぬ（忠）そんなら是から（市）一先内へ立歸り（賤）直に今宵の其内に（市）御家内連て當地の名殘り（九）エ、殘り多い（皆々）事ドやなア（甚）エ、きり〳〵と行ぬかい（市）ハイ只今參りまするト波の音合方に成り市兵衛千之助の手を引お賤お梅の手を引九左衛門お澤百姓皆〳〵附下手へは入る跡忠次甚九郎殘り（甚）ヤイならず者の小鼠忠次おのれも當所を立退くか（忠）エ、やかましいうつちやつて置ケ行てへ時分に勝手に行ア（甚）イヤこいつが〳〵名主に向ッて不禮千萬（忠）おらア上總のお構ひ者名主に義理もへちまもねへ（甚）何だト（忠）いはヾ無宿の此忠次こんたの支配は受ねへぞ（甚）イヤ受樣が受まいが以前は當所の生れの者お搆ひ場所へ置事ならぬト引立に掛るを突廻して（忠）爰へ寢泊りしやアしめへしわらド脚半が見へねへのか（甚）何と（忠）さつきから肝癪の虫を堪へた意趣晴しだト傍に有る汐木を取て甚九郎の天窓を打割る甚九郎のり紅に成り（甚）ヤアこりやおれが天窓をト忠次

へ掛るを（忠）是で虫が〇ト甚九郎を投退け（納つたはト三度笠をかつぐを道具替の知ら
せ甚九郎天窓を押へる此見得波の音濱唄にて道具廻る
本舞臺向ふ冠木門生垣内に茅家根土藏など名主の宅の体是に續イて百姓家田甫の書割夜る
の遠見上手に掛稻道祖神の石碑村境の傍示杭松の釣枝日蔭より同ドく釣り枝下手一面に藪
疊都て次郎兵衛宅門外の体時の鐘合方にて道具留る
ト右の鳴物にて上手より九左衛門先にお澤百姓皆〳〵出て來り（九）扨氣の毒千萬な次郎
兵衛殿の家財家財殘らず上へ上り物主水樣のお目こぱしで手廻りの物を下されしゆへ夫を
持て夜の内に木更津迄行との事（澤）年頃お世話になつた私ら殊には悴が鹿相から斯いふ
事になつた故道迄お送り申そうと連立て來ましたがまだ跡は見へませぬかト九左衛門上手
を見て（九）アレ〳〵モウ市兵衛殿が出てムつた（皆々）是から一所に行ませうトやはり
合方にて上手より風呂敷包を附しわんぱつ駕を若イ衆の百姓かつぎお賤抱子を抱キ千之助
の手を引附添跡より市兵衛風呂敷包を脊負お梅抱子を脊負連立出て來り（九）市兵衛殿
（皆々）モウ仕度が出來ましたか（市）是は〳〵皆の衆御苦勞でムります（澤）市兵衛
殿御隱居樣はとうでムります（市）どうも御苦勞が增のでお心能ムりませぬが所拂の事な
ればどこへお願ひ申事もなりませぬ故先お駕で木更津迄參ります積りでムりまする（九）
おあい拶を申ますのでムりますが返つて御迷惑でムりませうから御挨拶は申ませぬ（澤）

宜敷おつしやつて下さりませ（市）畏りました皆樣の思召は私から申上まする〇サアどこ
迄お出被成ましても同ド事でムりまするモウお返り下さりませ（〇）イヤ〳〵木更津迄
（皆々）お送り申ませう（市）夫は有難ふムりますが爰が村境でムりますれば是でお別れ
申ませう（賤）お送り下さるのは有難ふムりますがお別れ申のが思ひでムりますからモウ
お歸り下さりませ（九）そんなら是で別れますが任所が何所と極つたら早速便りをして下
され（市）是非お知らせ申まする（賤）左樣なれば御機嫌宜しふ（九）お前方も（皆々）
達者でムれト波の音に成り九左衛門お澤を何〳〵せり立上の方へは入るお賤跡を見てハア
ヽト泣市兵衛も思入有て（市）コレお賤何を泣のだ（賤）皆さんに別れたら心細くなりまし
たわいナ（市）そうさ大風の吹た跡の樣だト市兵衛も愁ひの思入（千）コレお賤眠くなつ
たわいの（賤）チヽそうでムりませう〳〵モウ少しでムりますからお辛抱被成ませト知ら
せに付日蔭より月出る誂への合方に成り市兵衛後ロへ思入有て（市）お賤見やれ月が皎
〳〵と冴へたので旦那樣のお內が見へるが今見るのが見納めだ（賤）ほんにあのお門もけ
ふ限りモウ見る事はならぬわいナ（市）アヽコレ御隱居樣へ聞へるからモウよい加減に思
ひ切てお駕に附て先へ行（賤）アイ〳〵そんなら先へ行程に早ふ來て下さんせ（市）チヽ
直に跡から追附は（駕）サアおかみさん參りませうト是にてお賤跡を見て（賤）アヽモウ
是がト名殘り惜さ思入（市）コレ早ふ行ぬか（賤）ドレ參りませうわいナト時の鐘合方か

すめて波の音になりお賤跡へ心の殘る思入にて見返へり〱駕に付千之助の手を引向ふへは入る跡市兵衛お梅殘り抱子泣をいぶり付田舍の子守唄を諷ひ居る（梅）とつさん赤がないていけないよ（市）ヲヽ泣なら坊は爰へよこせ○ト抱子をとり懷へいれ手めへは先きへ行ばよかつたに（梅）おいらはとつさんと一所に行よ（市）それドやア一所に行ケ○ト合方にてお梅先へ立行市兵衛行かけ跡を振返り見て（アヽあの内もけふ限り誰が住居になる事か名殘り惜しひ事だなア○ト抱子泣をいぶり付（ヲヽ泣な〱○コレお梅早く歩かぬか（梅）おいらアねむくなつたから早く内へ行度よ（市）コレモウ歸る内はないは（梅）あすこの内はト跡へ指さす（市）モウあすこへは行れぬは（梅）ハアヽト泣（市）ヲヽ尤だ〱○ト脊中をさすり乍行掛る能程に向ふ遠見打返しにて遠くなりし遠見になる（うか〱來る内遠くなつた○ト跡見返り〱跡ずさりに行市兵衛はつと思入有て（アヽ南無三仕舞ふた（梅）とつさんどうしたへ（市）赤がしいをした○ト此時又遠見打返し遠くなるを見て（最早是が○トとん〱と跡へ下り留るを木の頭（見納めなるかトのび上り見送るを本釣鐘三重にて

ひやし幕

ト幕外波の音誂への合方にて市兵衛お梅をせり立向ふへは入る

版權登錄

（定價金十錢）

明治廿一年十二月廿六日印刷
明治廿一年十二月廿八日出版

版權與行權所有

著作者　吉村新七
本所區南二葉町卅一番地

發行者　吉村いと
本所區南二葉町卅一番地

印刷者　川目直益
京橋區鎗屋町九番地

賣捌所　歌舞伎新報社
京橋區銀座四丁目十六番地

Y-76

[illegible]脚本上巻

敵討噂古市

上総錦小紋單地

合壹冊

088466－000－2

特52－600

敵討噂古市・上総錦小紋単地　上巻

河竹　默阿弥（吉村　新七）／著

M21

DBJ－0120